

として観音信仰が盛んになったと考えられよう。

杭州の次は、金華に赴いた。金華市博物館で見学をしてから、金華市図書館に行き、資料を調べた。金華での最大の収穫といえば、やはり良渚文化の出土品を自らの目で見て、



写真3 杭州の古武林門跡地

直に解説を聞くことで、稲作文化の歴史について理解を深め、稲作文化と水神の繋がりを歴史の実物を通して実感できたことであった⁽¹⁾。



写真4 呉山の観音信仰

金華の次は、衢州を訪れた。衢州は文字通り、四通八達している。町の南は福建の南平と隣



写真5 杭州孩児巷

接し、水路を通して、煬帝の時に開削された大運河と繋がっている。そのため、衢州は交通の要衝として発達し、貿易が盛んであった。私は『衢州府誌』、『衢県誌』の記載に従って、天皇巷の媽祖廟を調査した。媽祖廟は市の中心地域にあることから、媽祖信仰が繁栄していた往時

の面影を今でもしのぶことができる。

12日に上海に戻って調査資料をまとめ、



「調査成果 写真6 金華市博物館の稲作における展示

報告会」の準備をした。その間、華東師範大学の先生の勧めで、上海で開催された敦煌文化展覧会を見学した。15日に華東師範大学で報告をし、2日後に神奈川大学に戻った。

今回の訪問調査は陳勤建先生と蘭曉敏さんのおかげ



写真7 天皇巷の入り口

で、研究成果が大いに実った。陳先生のご指導及び蘭さんの親切な支援に心から感謝し、これからも研究に邁進していきたい。



写真8 天皇巷天妃宮

〔注〕

(1) 鈴木陽一「白蛇伝」の解説—都市と小説 / 神奈川大学人文学研究所所報 (23)、p15-36 に稲作文化と水神について論述があった。

バンクーバーにおける収蔵資料等の保存・修復について

平田 茉莉子
(歴史民俗資料科学研究科)



海外には、多くの日本コレクションを所蔵している博

物館・美術館が存在している。それらの博物館・美術館



ではどのような方法で所蔵資料を保存・修復しているのか、また海外にも表具師・経師のような古来より文化財保存技術の一翼をになう職人が存在するのかを調査するために、海外への派遣を希望した。

2016年2月2日～2月21日までの約3週間、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学(The University of British Columbia、UBC)のアジア学科に滞在した。今回はUBC図書館、UBC人類学博物館(UBC Museum of Anthropology、MOA)、バンクーバー博物館(Museum of Vancouver、MOV)、日系博物館・文化センター(Nikkei national museum & cultural centre)、州立ロイヤル博物館(Royal British Columbia Museum)、ビクトリア・アート・ギャラリー(The Art Gallery of Greater Victoria)の6館を中心に調査を行った。各館での保存修復担当者・日本コレクション担当者に、保存修復の方法や使用する素材、日本コレクションの扱い等についてのインタビューと施設見学を行った。



写真1 MOAの修復室

私が今回の調査で驚いた点が二つある。まず1点目は、バンクーバーでは州立・私立に関係なく、館毎での保存修復関係者同士が連絡を密に取り合う協力体制が出来ていることである。常に保存修復関係の最新の研究情報を共有し、修理方針を決める会議やワークショップ等を行っていた。その理由として考えられるのは、カナダのクイーンズ大学にコンサベーション課程があり、そこの出身者が多く活躍していることが非常に大きいと思う。日本では学会などはあるが、各修復室や工房によって独自のやり方などがあり、すべてを共有することはあまりないといえる。ましてや所属が違えば尚更である。日本でも、関係者同士がこれまで以上に密なコミュニティをつくることができれば、保存修復の技術はより発展するのではないかと考えられる。

2点目は修理の素材として、日本の和紙が多用されていることである。以前より海外の修復現場で和紙が使用されているという情報は耳にしていたが、その使用方法の多様さに驚いた。私は和紙・洋紙共に紙素材の資料の修復に和紙が使用されていると予測していたが、実際に

は日本コレクション等の紙素材の資料だけでなく、カゴや仮面など木の素材の資料の修復



写真2 修復室で使用している和紙のサンプル

にも和紙を使用していることが分かった。また、紙素材の資料を展示する際には、マップボードに生麩糊で直接貼り付けていた。日本産の素材は安全だという一種の信仰のような考え方には少し疑問を感じるころでもあるが、近年ユネスコの無形文化遺産に登録された理由も納得できる。

ところで、バンクーバーでは表具師・経師のような古来より文化財保存技術の一翼をになう職人の存在を確認することは出来なかった。その理由として、バンクーバーの歴史は新しいということが考えられる。州立博物館の展示を見ても感じたことであるが、開拓以前は非文字文化の原住民の歴史ということでひとくくりになされていた。各館の担当者に聞いてみてもバンクーバーに関する資料は新しいものが多いから、今まで修理の必要性がなかったとの回答が返ってきた。他国のコレクションに関して修理の必要がある場合は、各国の保存修理機関に協力を仰ぐことも多いそうである。



写真3 修復室で使用している生麩糊

今回の調査日程がブリティッシュコロンビア大学のリーディングブレイク期間(一週間ほどの短い春休み)と重なっていたにもかかわらず、アジア学科の許南麟先生は快く受け入れてくださった。またチューターのXiaoyiさん、その他アジア学科の皆様、各館の担当者の皆様、ホームステイ先のホストファミリー、神奈川大学非文字資料研究センターの皆様にとたくさん助けていただき、非常に有意義な調査が出来た。お世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。